

令和元年度 東京都立永福学園

【自由な美術活動空間】

ワークショップ実施

令和元年11月28日（木）～令和2年3月29日（日）

シンポジウム（座談会）報告書
「障害のある生徒の美術活動を考える」



《シンポジウム概要》

開催日：令和2年3月5日（木）13：45～16：45（予定）

* 新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、「座談会」に変更し、
令和2年3月26日（木）13：30～15：30に実施

会場：東京都立永福学園 3階 美術室

登壇者：本郷 寛 先生 東京芸術大学美術学部名誉教授 / 参与

中津川浩章 先生 Artist / Art Director

西村 留美 先生 東京都立文京盲学校主任教諭

司会：中西 晶大 ディレクター

【座談会の様子】



永福学園校長の挨拶



写真による活動報告



中津川先生と本郷先生の座談



メモを取る参加者



文京盲学校の美術活動紹介



西村先生から現場のお話

《座談会の内容》

1 美術創作スペース「自由な美術活動空間※」報告

※「自由な美術活動空間」とは、本事業の本体で、優れた美術的才能を秘めた特別支援学校の生徒・卒業生を対象に、画材を豊富に用意して自由に創作活動ができるようにした空間であり、令和2年1月18日（土）から2月22日（土）までの間に、6回実施した。

第6回の活動を、記録写真を用いながら中津川先生が報告し、参加者と質疑

【主な意見】

- ・シールやテープを使って「遊ぶ」ところから創作を始めた。
- ・線が細い、色が薄いというのが特徴の制作者がいる。これに対し、教員が「もっとしっかり線を描きなさい。」「目立つ色を使いなさい。」と指導することがある。
- ・保護者の中にも抽象的な作品を「障害特性の反映」として否定的に捉える人がいる。
- ・（何かが足りないと感じがする作品に対し）何が足りないのかを考えさせられる。想像力が膨らむ。すると、何か足りないけれど、これで十分だと思える。
- ・（絵の具の水をポタポタ垂らした作品に対し）制作者は水が垂れることに満足している。それだけで良いのに、私たちは絵を描くための「土台作り」にしか見えない。
- ・いろいろな色を混ぜる。一般的に汚い色になりそうだけでも、それを使ってすごく綺麗な画面を生み出す。普通の美術教育だと3色以上の色を混ぜると茶色になるから「混ぜないで。」と指導するが、あらゆる色を混ぜ、あり得ない色を作り出す。

2 美術創作と特別支援学校における美術教育について

中津川先生と本郷先生との座談に加え、他の参加者の意見も積極的に聴取

【主な意見】

- ・彼らは作品を描きながら、自ら何かを感じ取っている。このため途中で止められるし、まだ描き続けると自分なりの美しさを表現できる。
- ・日本の美術教育は、西洋のものが基礎となっている。そこに、現代アートという概念が入ってきた。その解放された表現をどこまで先生たちが許容できるか。
- ・（美術を担当する）先生が、生徒の多様な表現を認めて、その変化に対応していかなければならなくなっている。
- ・正しい筆の持ち方を教えるのも良い。しかし、それだけではではみんな同じ線になってしまう。もっと自由な表現方法を取り入れていった方が良いのではないかと思う。
- ・美術の世界においては、障害の有無は関係ないかもしれない。
- ・アートプロジェクト展でも評価される作品は、多数の審査員が選んでいる。やはり良いものは良い。美しいものは美しいのだと思う。

3 現場の工夫など（都立文京盲学校の取組）

西村先生から都立文京盲学校の取組の紹介を受け、意見交換

【主な意見】

- ・都立文京盲学校からアートプロジェクト展に作品が選ばれている。
- ・前任の美術教員の指導法を引き継いでいる。生徒が作りたいと考えたもの否定しない。また、実現するように指導している。

- ・全盲の小学部児童と美術鑑賞に行った際、2 m程の彫刻に手を触れ「先生、これ風が吹いている」と言った。タイトルを見るとタイトルに「風」という文字が入っていた。
- ・おそらくその児童は、私たちがもっている目以外の目を持っている。
- ・健常者も障害者も多様な個性がある。美術の場合はそれを受け入れてくれる。
- ・障害者アートと健常者のアートを分ける必要があるのかと言えば、美術教育の中ではくくる必要はないと言える。
- ・障害があってもなくても、素晴らしいものは素晴らしい。

4 学校卒業後のアート活動の可能性について

中津川先生から「福祉施設でのアート活動」、「スターバックスでの取組」について紹介を受け、意見交換

- ・福祉では、毎日どう豊かに過ごせるのかが大切。その前提で、表現活動が福祉に一番足りていないという認識から創作活動が活発になっている。
- ・スターバックスに作品を買って貰うプロジェクトをやっている。現在、50店舗位と契約している。作品が素晴らしいから買い取って展示してもらっている。
- ・著作人格権は守っている。5年契約で作家の元に作品が戻ってくる。
- ・作家と企業とだけではだめで、その間にデザイナーとかキュレーターとか入らないと生かしきれないし、作品として生かしきれない。
- ・企業に作品を売る基準として、絶対にクオリティだけは下げてはいけない。いい作品しか出さない。それがないと福祉になってしまう。

《総括》

今回の座談会は、新型コロナウイルスの感染拡大を防止するため、換気を行いながら、少人数で距離を置いての開催となった。また、各テーマを参加者と共に協議していくという少人数ならではの進行とした。とても濃密な協議となり、予定していた時間も大幅に超えてしまった。

今回は少人数での座談会として実施したが、構成及び内容ともに、シンポジウムと同様のものを行うことができた。むしろ、多くの人たちと直接今回の協議を共有できなかったことが心残りである。

(担当：中西)